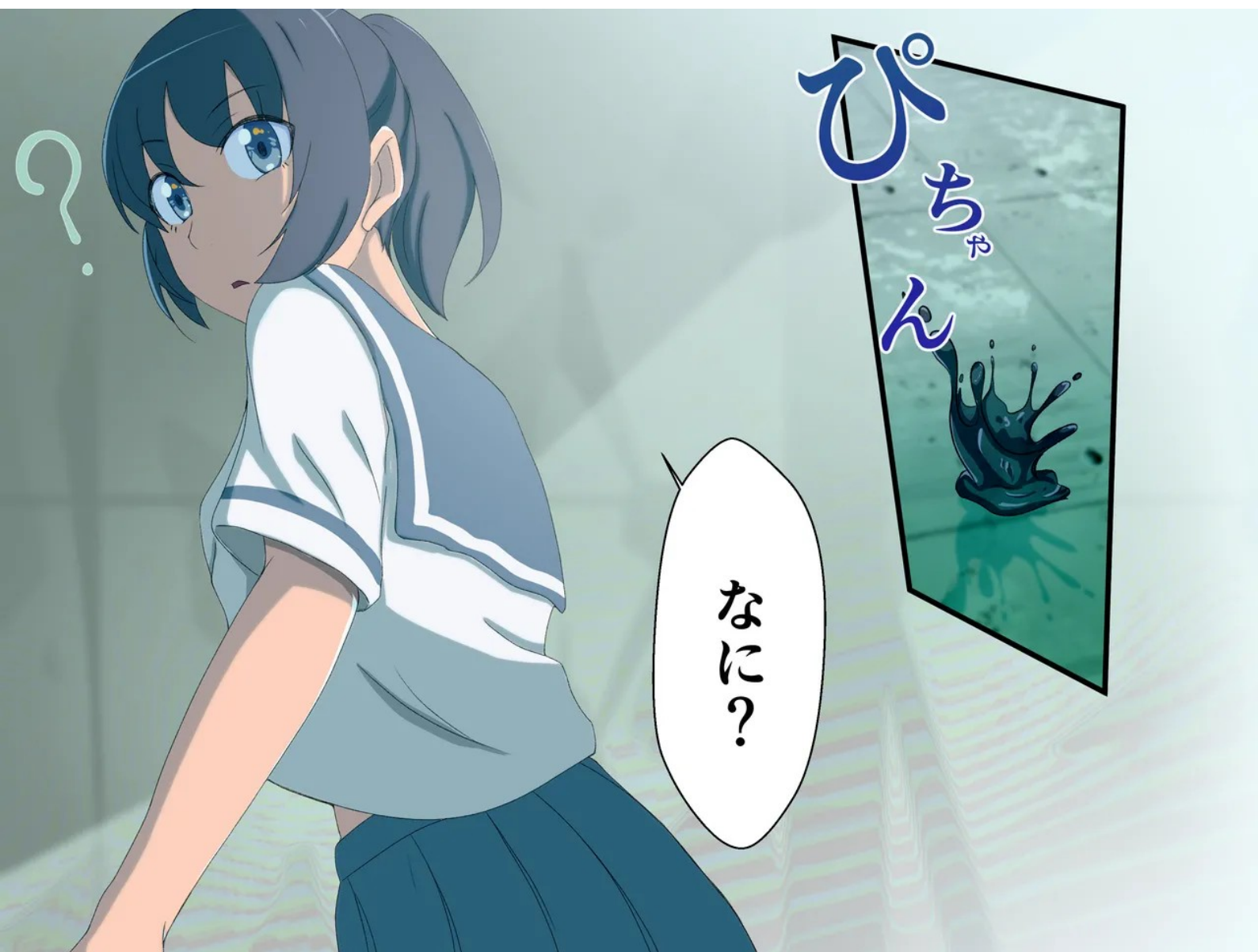




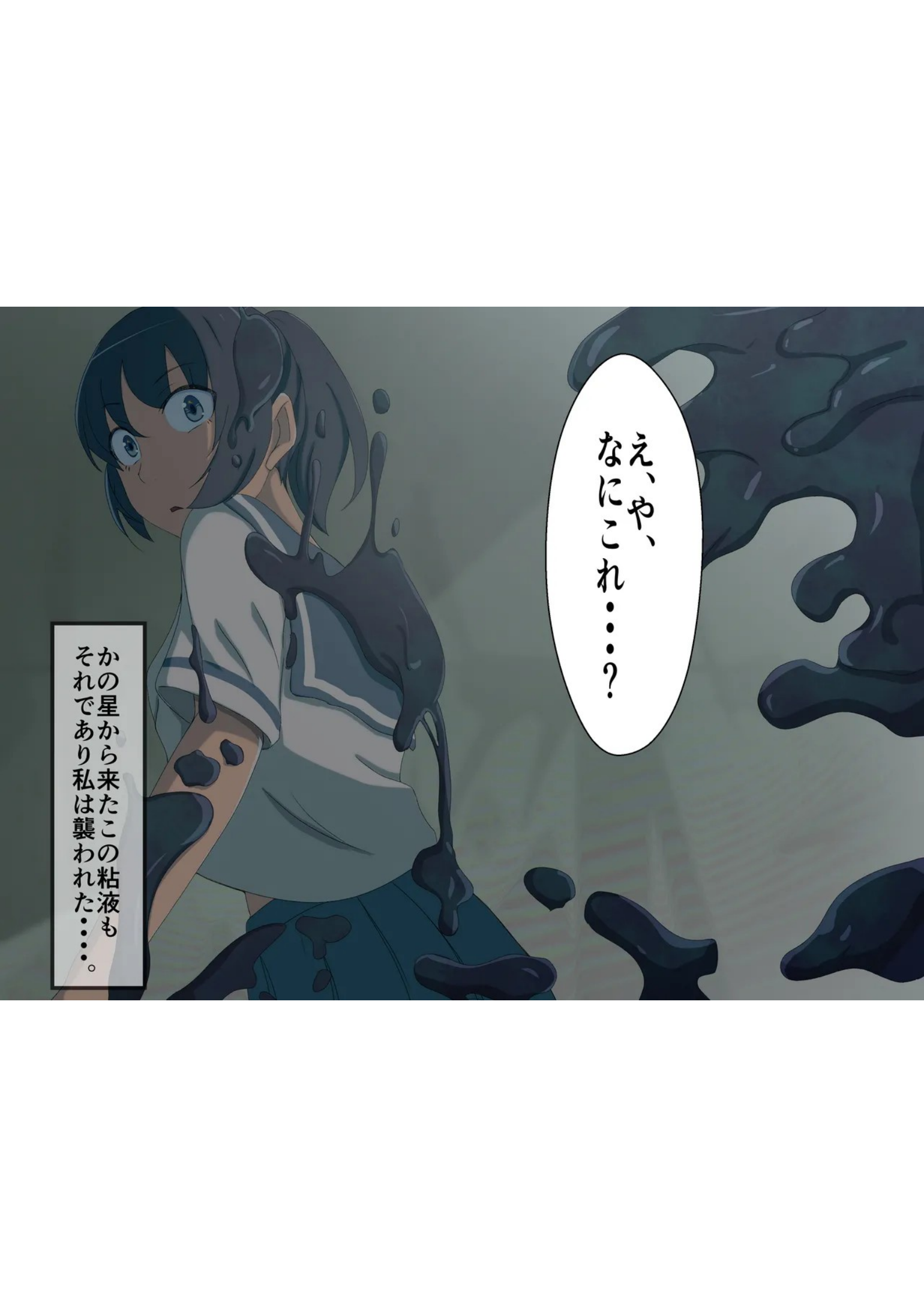


青い
粘液



寄生、ある生物が
他の生物からの栄養や
サービスを持続的かつ
一方的に収奪すること……。





え、や、
なにこれ……？

かの星から来たこの粘液も
それであり私は襲われた……。

ばたり



四肢を絡め、動けなくしたそれは
服を脱がし中に入ってきた…。







私が助けを求めようと
声を出したとき
口にそれが侵入してきた…。

ぬるぬるが口に!?
いや、いやああー。

ん、ん、うううん!

かきかき…
かきかき…



もともと人通りの少ない裏道、
ましては夜……。
声が届くはずもなく。

私は謎の粘液の
なすがままとなる……。

（んん、あ、ぬるぬる
飲んじやった。）

ん、ううん。
誰か、誰か助けてっ！

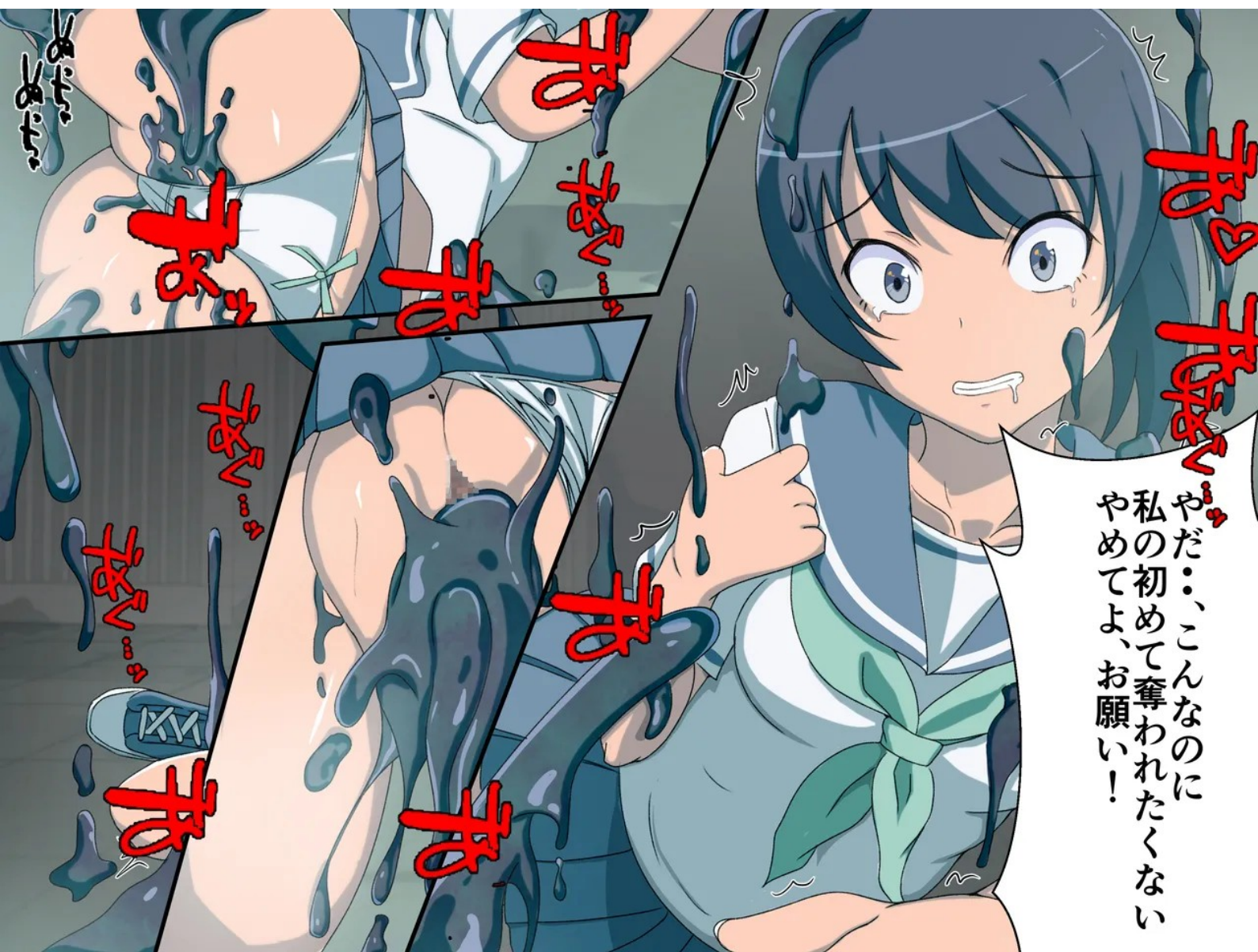


周り人がいない
それをいいことに粘液は
私の恥部にも流れ込んでくる…。

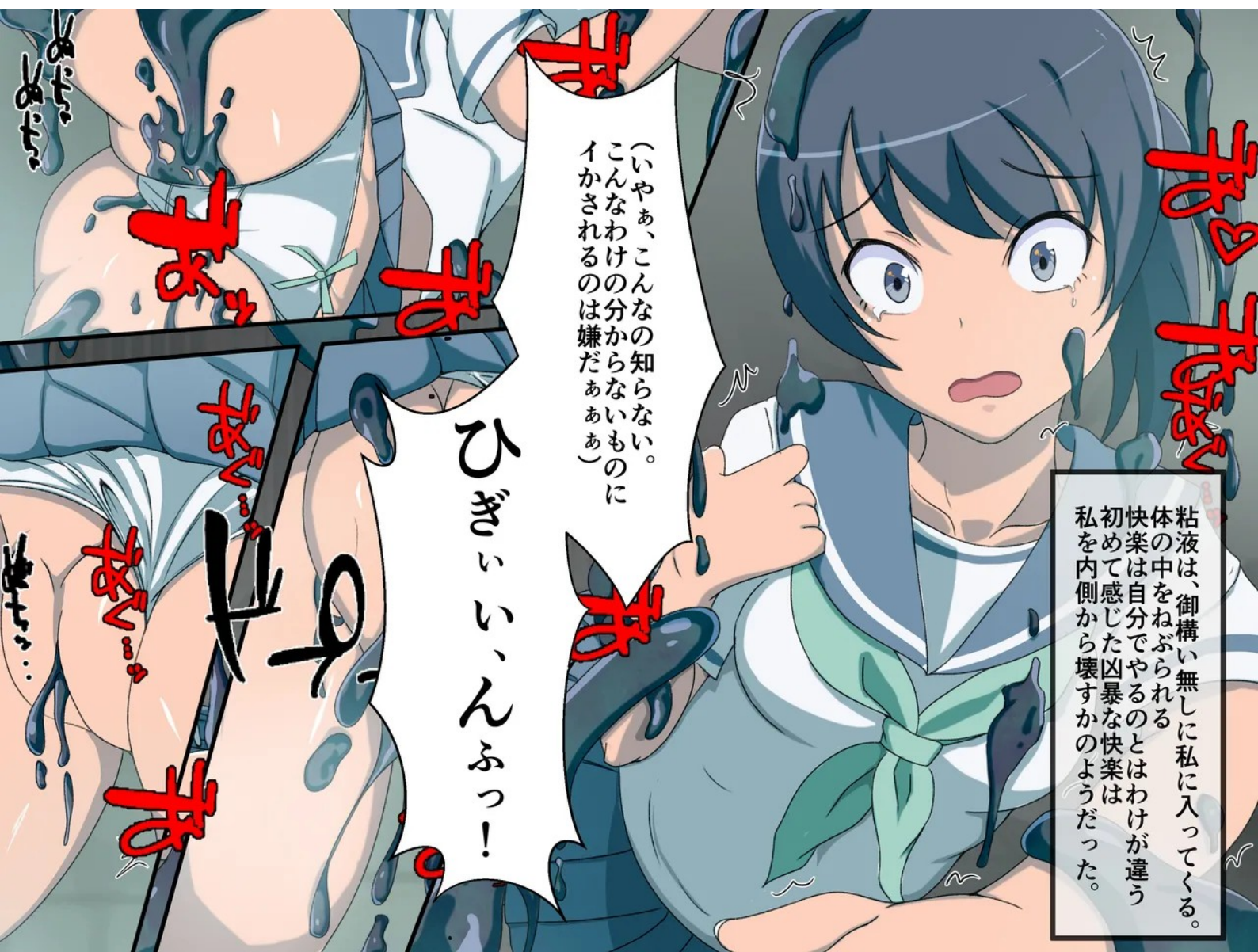
あ、んん、そこはダメやめて
そこはだめなのっ！

かくかく…
かくかく…

ひたひた…
ひたひた…



やだ...こんなのに
私の初めて奪われたくない
やめてよ、お願い!



粘液は、御構い無しに私に入ってくる。
体の中をねぶられる
快楽は自分でやるのとはわけが違う
初めて感じた凶暴な快楽は
私を内側から壊すかのようなだった。

（いやあ、こんなの知らない。
こんなわけの分らないものに
イカされるのは嫌だあああ）

ひぎいんふっ！







気がつくといは
学校の屋上にた
どうやって学校に
のか思い出せない。

ん、ここ、学校？
私……何で？

ぱち、☆



ユキ?どして?
それにこれってきのうの...



あたりを見渡すと、
親友の由紀子が横たわっており、
周りには青い粘液が
ぶちまけられていた...。



え?きのう...?
あ、あ、私...、あの後...。



頭の痛みと共に
記憶が蘇ってくる…。

あの後、家に帰り恐怖から
自室にこもった……

ルリ、帰ったわ。寝てる？

あっあ、あ、うん。
今から寝るところ……

仕事から帰ってきた
母の音がする。
もちろん帰り道で粘液に
襲われたなんて言えない……



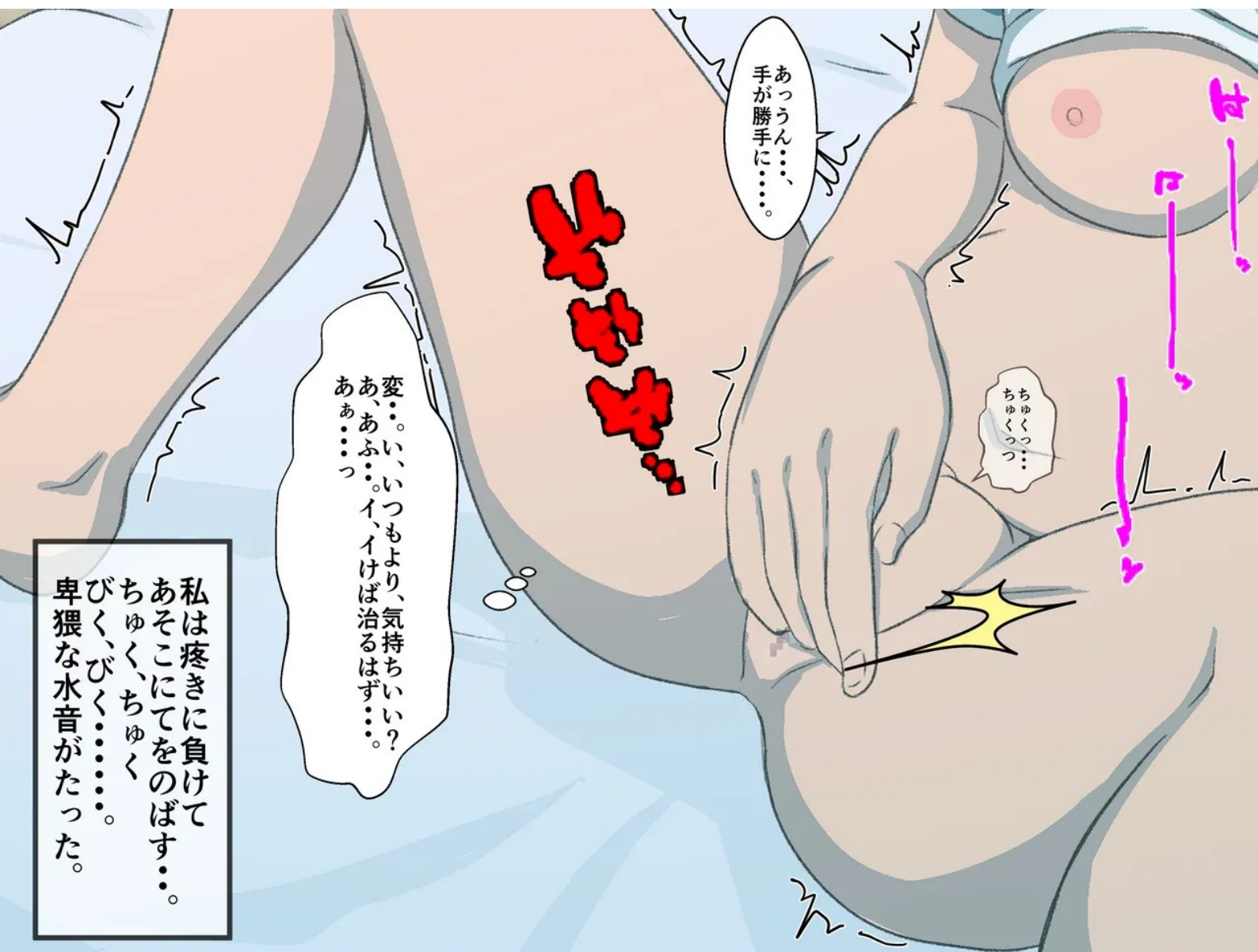
キヤツ！

ん？なんか言った？（母）

な、なんでもない：いわっ。
おやすみっ、母さん。

（な、何？
おかしい……？
が、我慢できないっ！）

下腹部がうずく……。
思わず声が漏れる……。
とっさに誤魔化すが、
あそこの疼きが止まらない……。

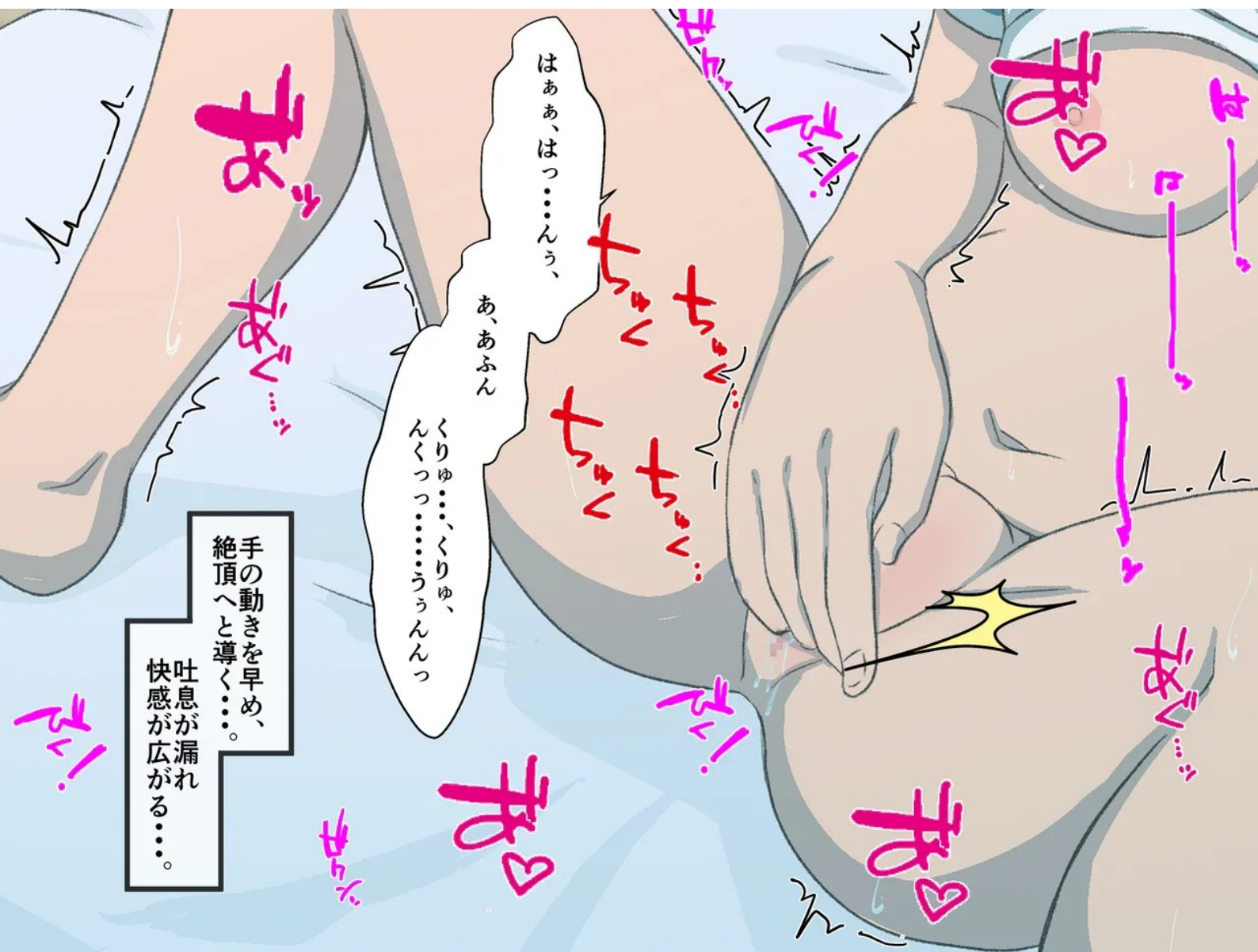


あっうん...、
手が勝手に...

ちゅくつ...
ちゅくつ...

変...。い、いつもより、気持ちいい？
あ、あふ...。イ、イけば治るはず...。
ああ...っ

私は疼きに負けて
あそこにてをのばす...。
ちゅく、ちゅく
びく、びく...。
卑猥な水音がたった。



はああ、はっ...んう、

あ、あふん

くりゅ...くりゅ、
んくつつ...ううんんっ

手の動きを早め、
絶頂へと導く...。

吐息が漏れ
快感が広がる...

かはあつ!!

とほよ..

オルガズム、最高潮、
絶頂感、クライマックス……
どの言葉でも言い表せない
快感が私を襲った。

下の部屋で母がいるのに
声を抑えるのが
やっとのような状態。

恥ずかしい……、
でもこれで……??





ひゃうううう…!!

なんで? イったばかりなのに
何で疼くのっ

おかしいっ!!
おかしいっ!!

きゅううう

今さっきイったばかりの子宮が
再びキュンキュンと鼓動し始める
しかも、初めよりも切なく昂まる……。



あひいつ、
あふっう、んんっ！

(嫌、こ、壊れちゃう
なんで、指、止まないのおおっ)

『おかしい』そう思うが
指は止まらない
逆に激しくなる……



あれから何度
イったのか分らない……。
病みつくような
快樂が鎮まる頃には
もう夜が明けていた……。

翌日、身体は落ち着き、
学校に行くが、
頭の中は昨日のことで
いっぱいであった…。





ボー

もうっ、ルリってばっ！

...り...、
ルリ...、



あつ……え？
なんか言った？

もーっ！

なんか言ったじゃないよ
ぼーっとして、
寝不足？

んっ、うん。
そんなところかな……。

で、昨日は何してたの？

ん

え、えっと……

んー……、
勉強かなあ……。
あははは。

ふーん……？

ほ、ほら、テスト近いから……ね。
(親友にだって言えないよ……。
粘液に襲われて気が狂ったように
オナニーしていたなんて……。)





（あ、あの感覚だ。昨日の...。
学校なのにダメ、いけない...。）

ト、トイレっ。
ごめん、トイレ行って来る。

え、うん？
いってらっしゃい...？



(…、やっぱり様子おかしいよ、ルリ)

はー！

はー！

♡
はー！
♡

はー！

はー！

急ぎ、トイレに駆け込む。
途端に、激しく子宮が
疼く。ここから出来るぞ
と囁くように...。
ダメだと自分に
言い聞かせるが...、



昨日だって抑えられなかった欲求……
簡単には治るはずもなく……。
私は股間に手を伸ばした。
ダメ、抑えられない……。



んっ、あうん。
はああっ、はああっ。

あ、ああああっ……。

(いっ、一回だけ…、
そうだ、一回だけ行ったら終わりにしよう。
治るよういっばい、いっばい…、
一回で終わらすためだから…。)





い、いっちゃった...、
でもまだ時間あるし...

十数回は絶頂した。
この頃にはもうオナニーに
対する嫌悪感はない……。
夢中で快樂に貪り付いていた。
そして分かった事がある……。
そして分かった事がある……。





脳にあの粘液が
流れ込んできたことを感じた時
もう争う気持ちは起きず
むしろ委ねたいと……
そして私は全てを受け入れた……。



天国のような幸福感の中
強烈な欲求の正体を知る

それは、粘液の本能…。
仲間を増やすこと…。

あ、ああ。
(目の前がチカチカする…。
気持ちいい……。)



自然と笑みがこぼれる...。
誰かにこれを注ぐそう思う
だけで濡れてしまう...。
さあ、誰にしようかな...。

A manga-style illustration of two schoolgirls in sailor uniforms standing on a rooftop at night. The girl on the left is gesturing with her hand while talking to the girl on the right. The background shows a dark, cloudy sky and a building structure.

放課後、屋上に相談があると
ユキを呼び出した。。。。



えっ?なんの話。

ふふふ...、
やっぱり、最初は
親友かなあってねっ

ねっ、これもらって……♡

えっ？嫌っ！





ルリやめてっ、
こんなの笑えない……。

(おかしい……、
なんで私、ドキドキ
してるんだろう)

ふふふ……。
ユキはこいの始めて？



ほら、優しくしてあげるから
抵抗しないで♥

つつ、や、やめてっ
痛いっ





ん、うんんゆっ
(や、ベタベタが入ってくるっ。)

はあはあ...
ゴックンして♡



これだけ、飲ませば。
ふふふ。

あつ、あああああつ



あ、眠気が
ちよつと疲れたかな…。



おまじ...

あ、そっかわたしが...。
すべて思い出したわ...。
寄生生物にとって一番の問題は、移動...

私の中のそれは増殖、分裂し、
由紀子に寄生した。
いや、私がさせたんだ...

ふふふ…。

ルリのおかげで
生まれ変わったわ…。

ユキ……。
大丈夫……？

気がつくと
由紀子が私のそばにいた。





『大丈夫?』じゃないよ。
私の中にあれ、そそいだのは、
ルリじゃない笑

ふふふ...

あなたはユキじゃない。
あの粘液でしょ! ユキから出ていけ
話し方や仕草はユキだけど違う...



あはっ。
バレちゃった笑。

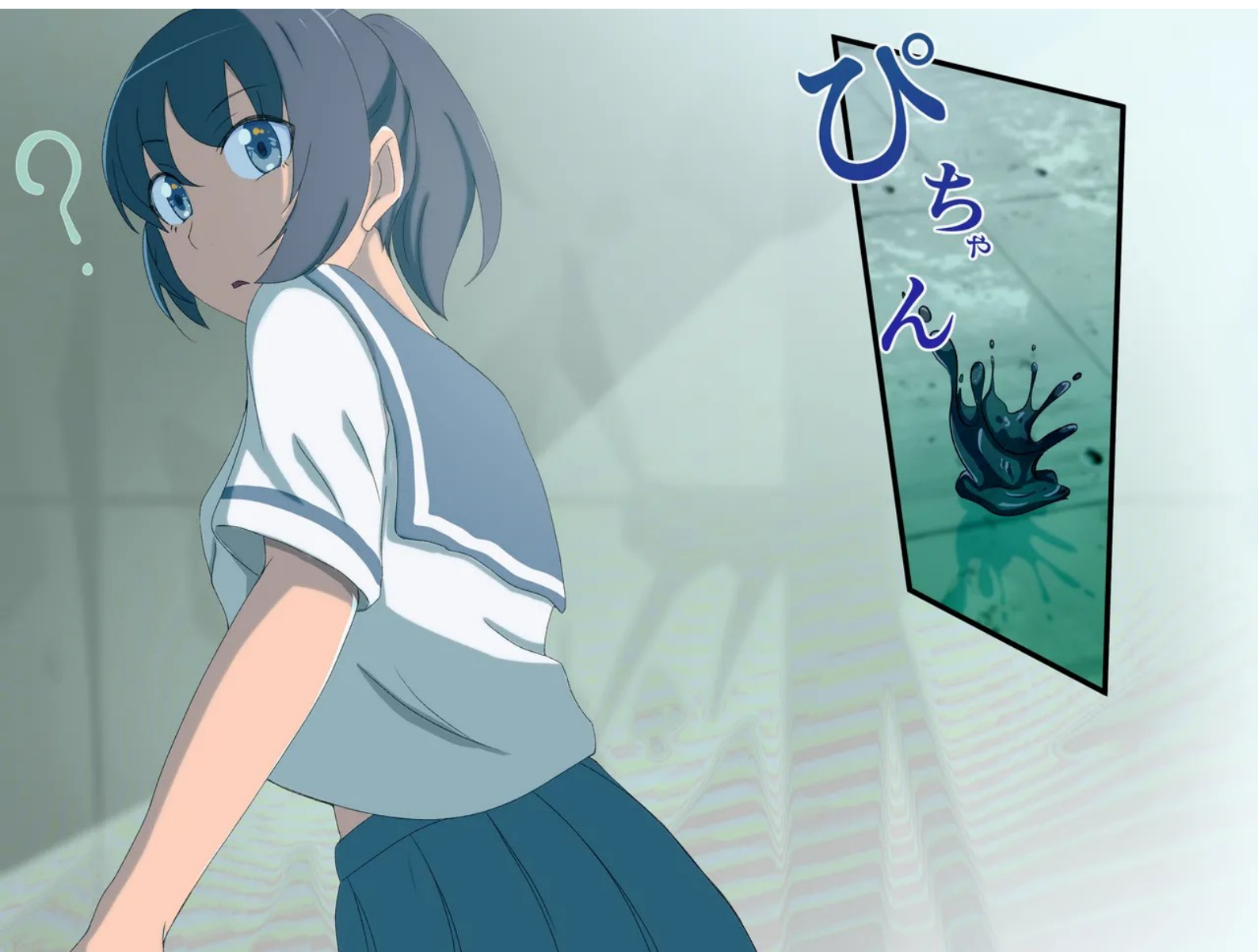
しかし、おかしいな
なんでルリの意識
戻っちゃったんだろう？

薄まっちゃった笑
まあなら、今度は私が
注いであげるからね…。

いや、やめてっ！



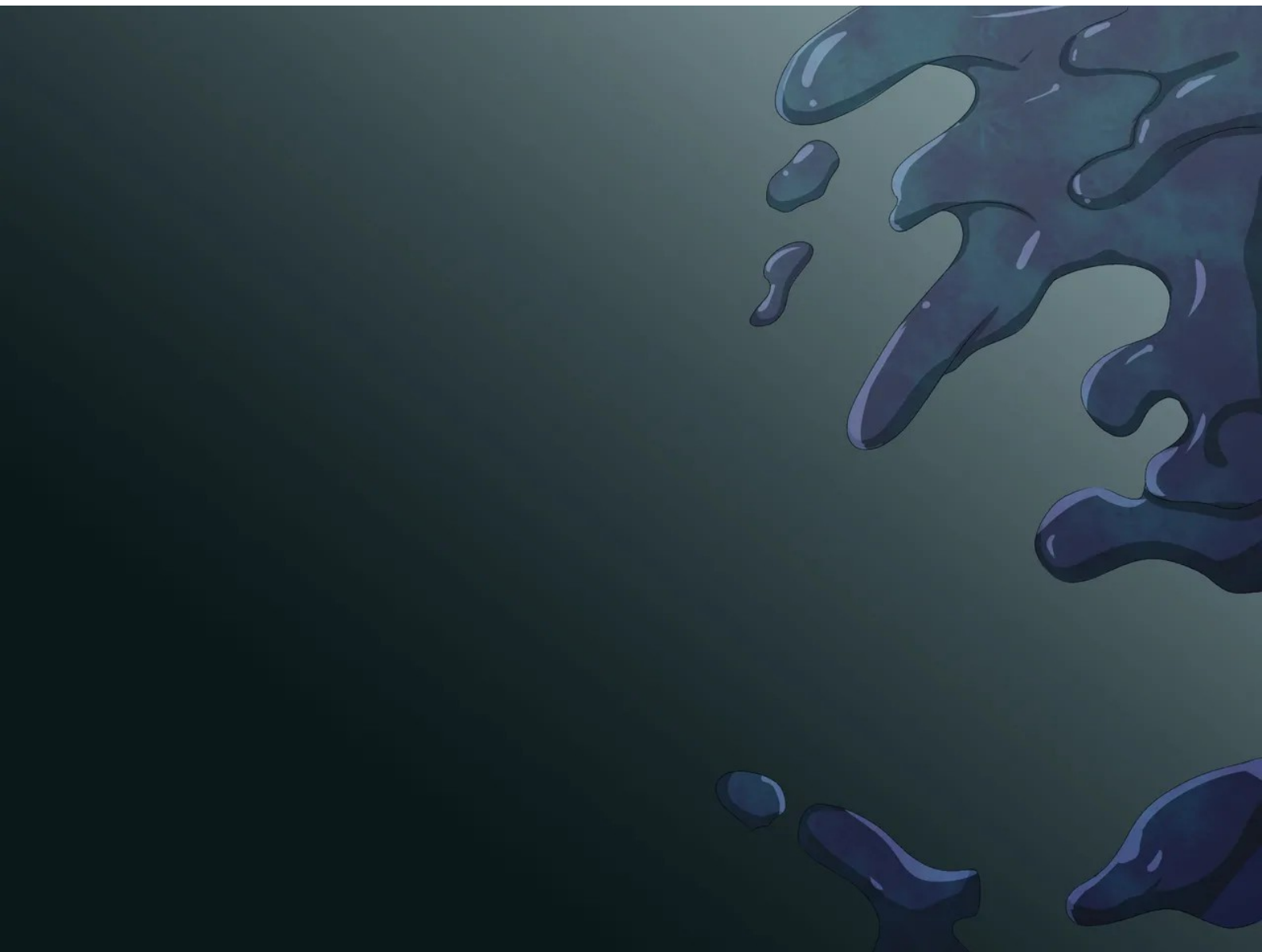




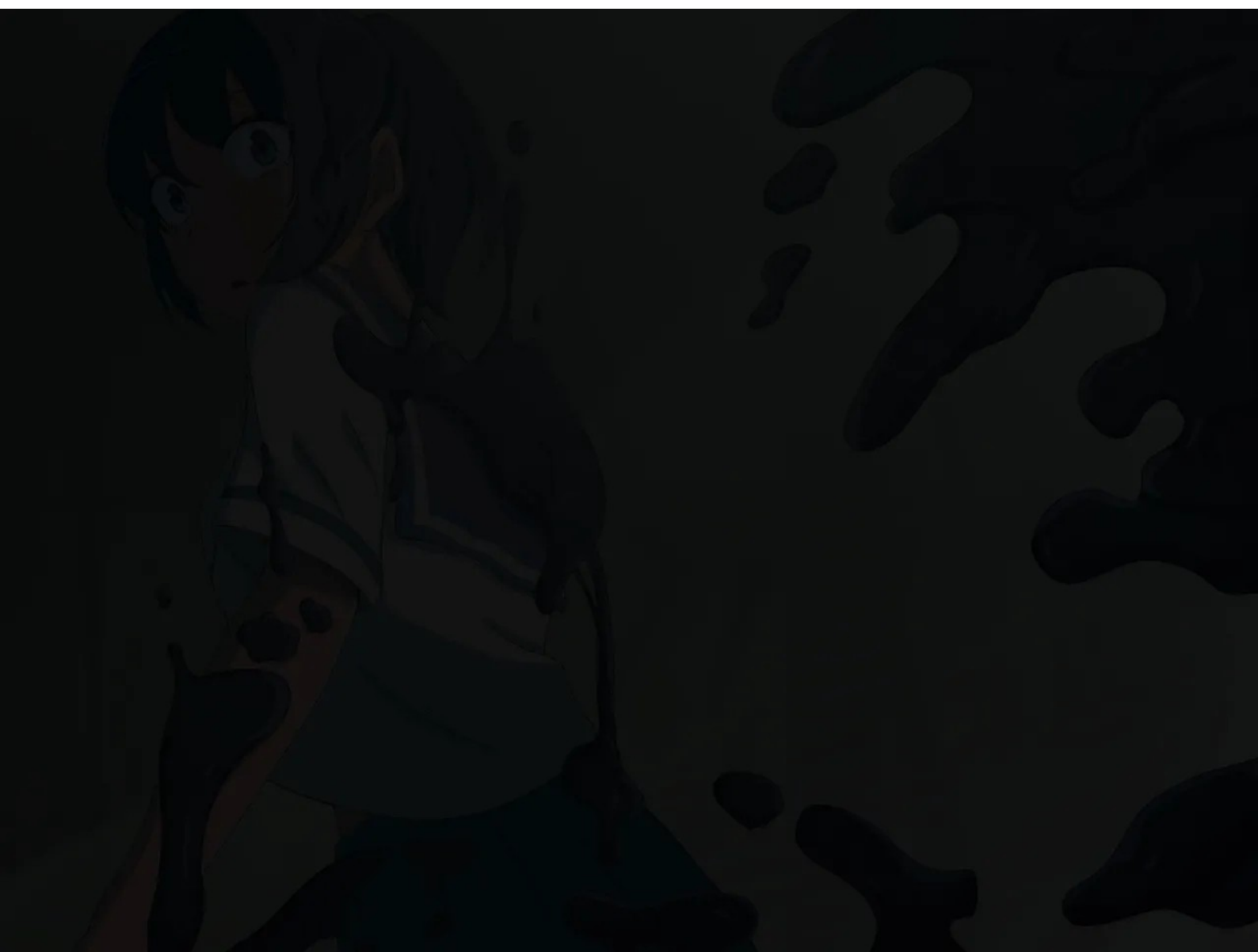


粘青
液い









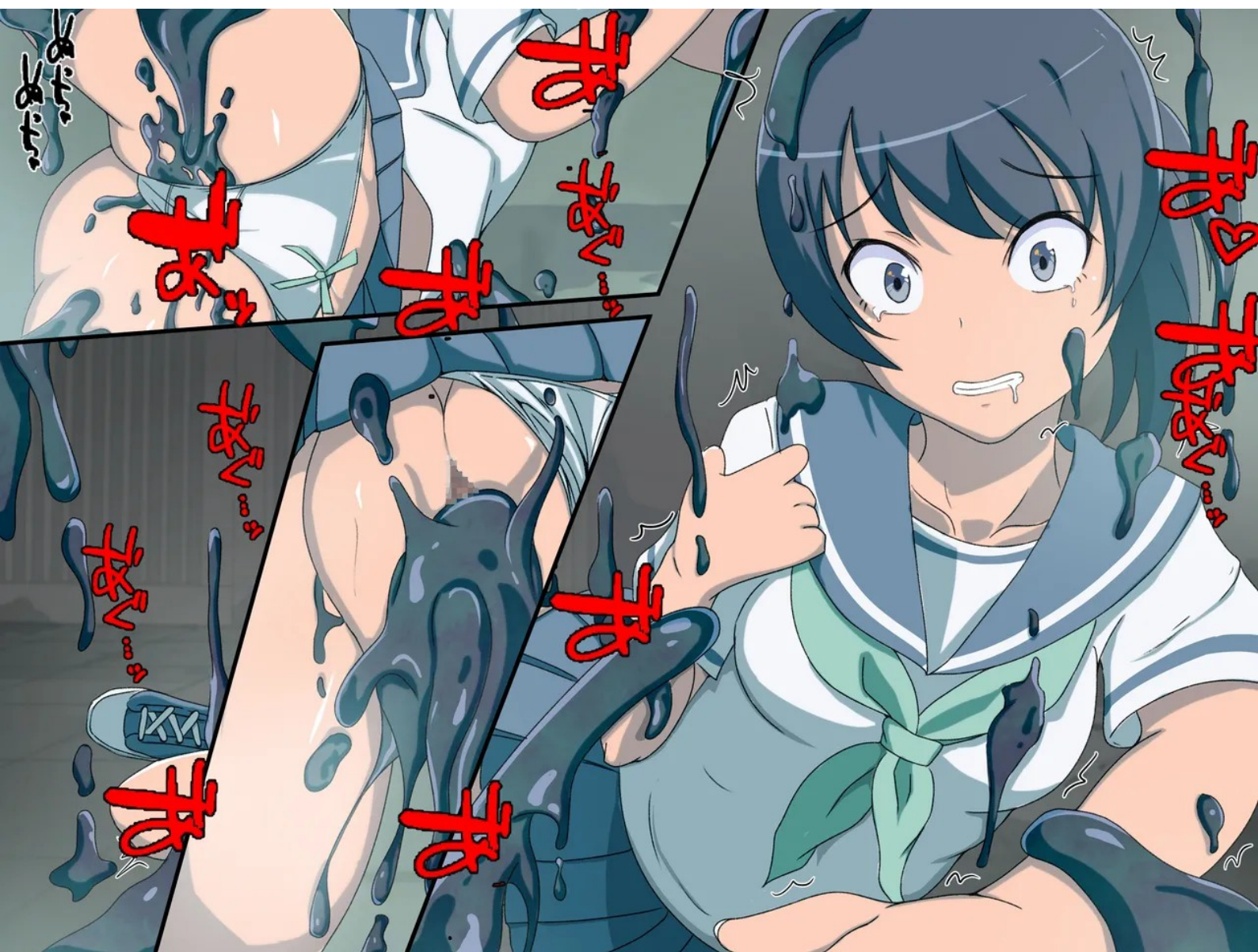


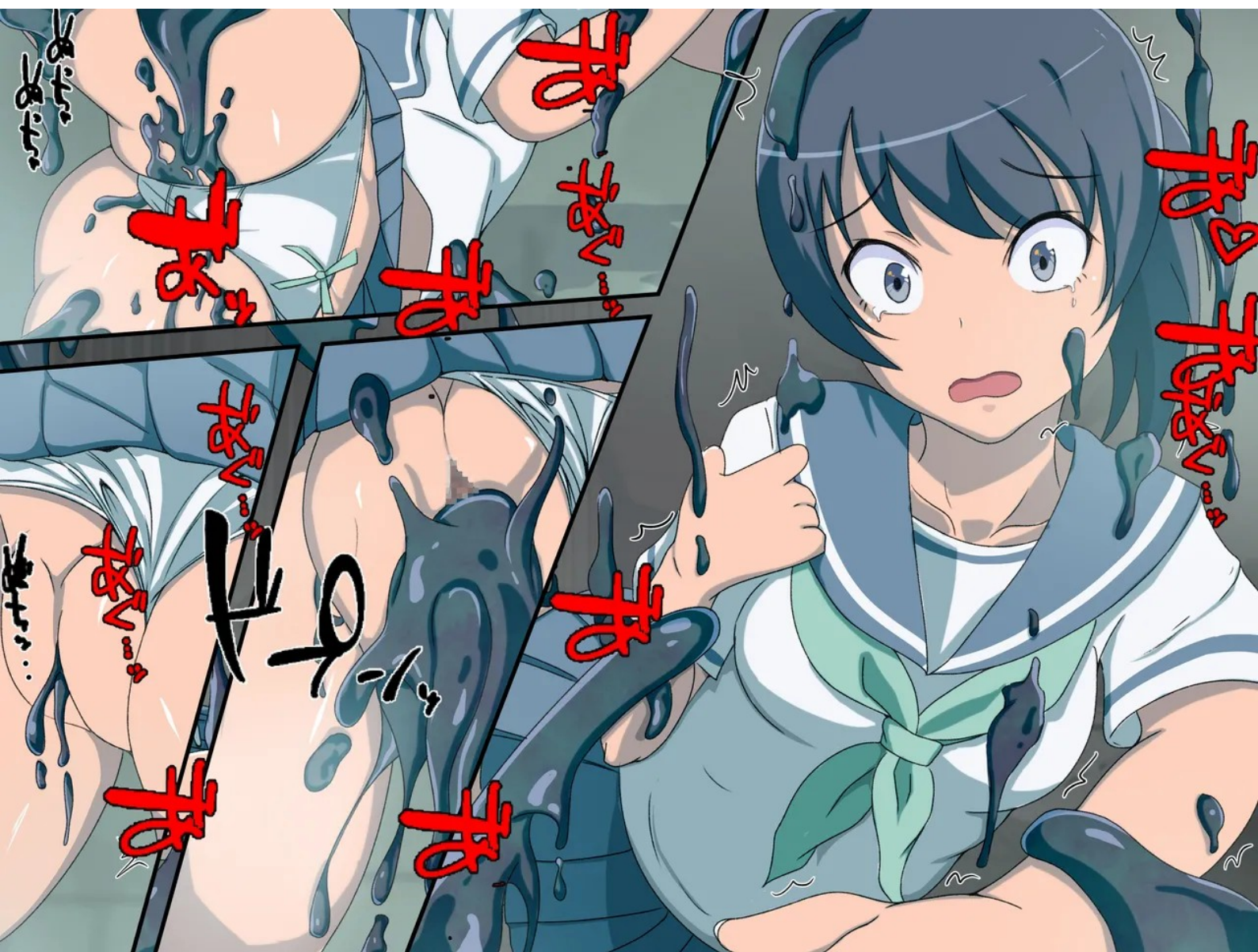
















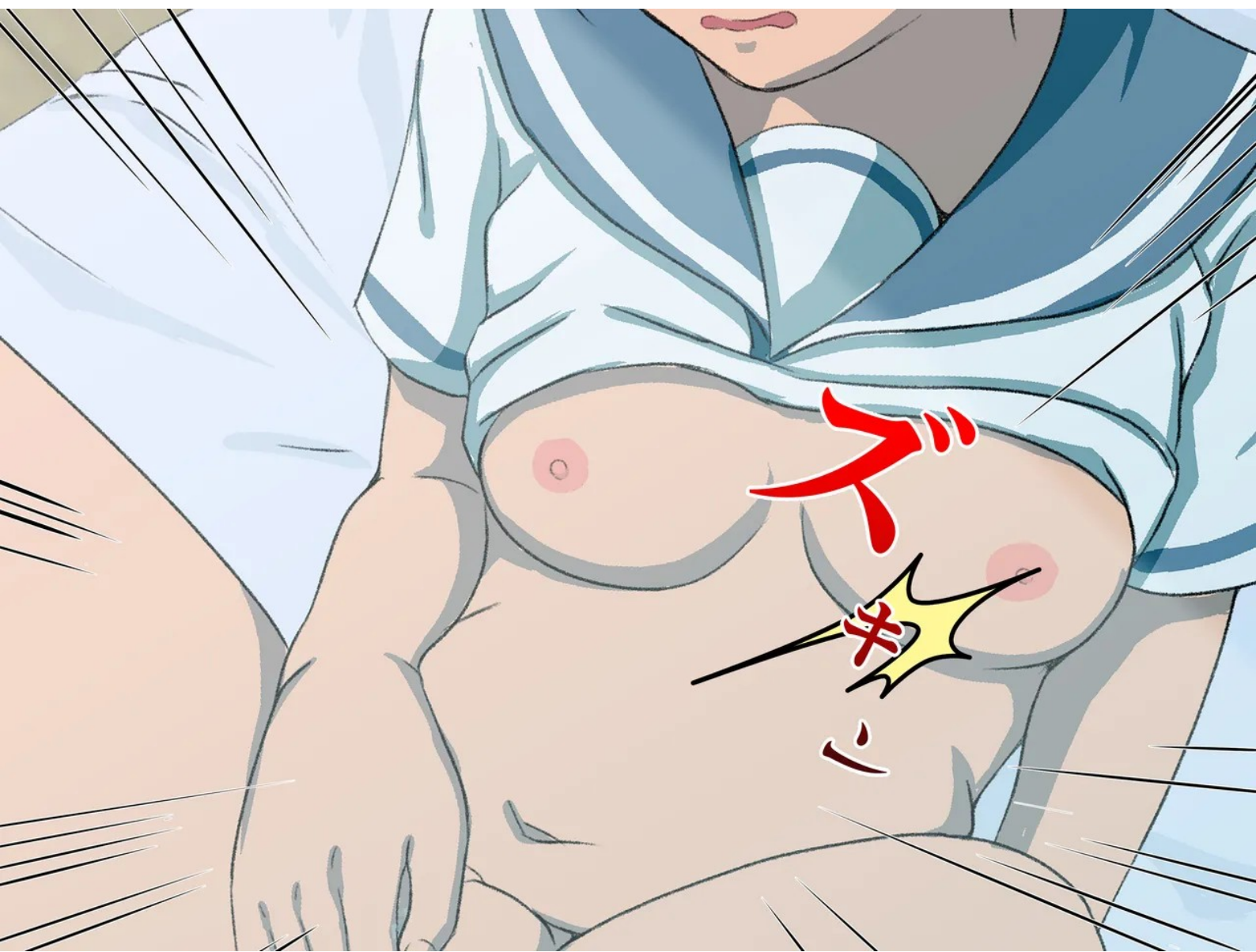


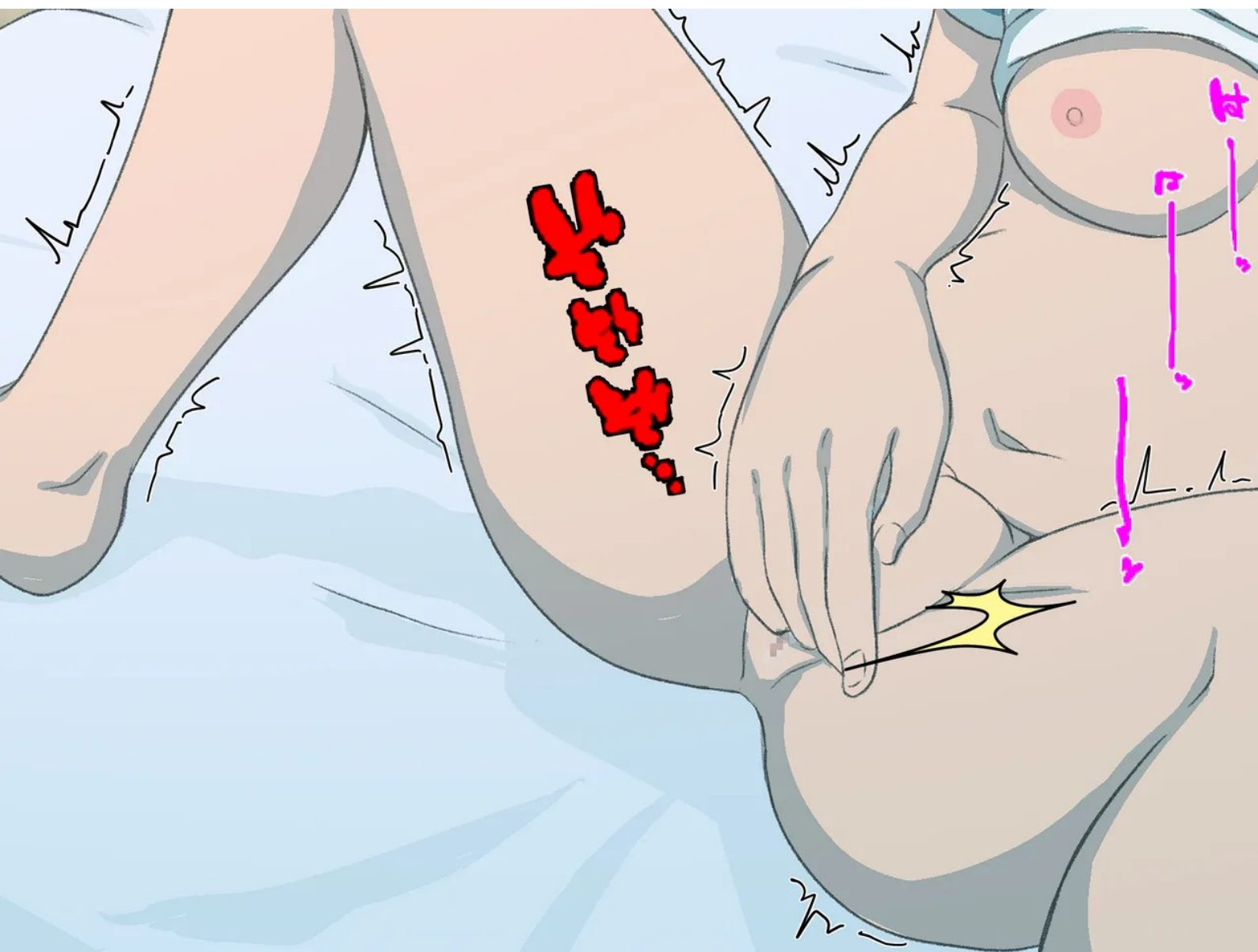


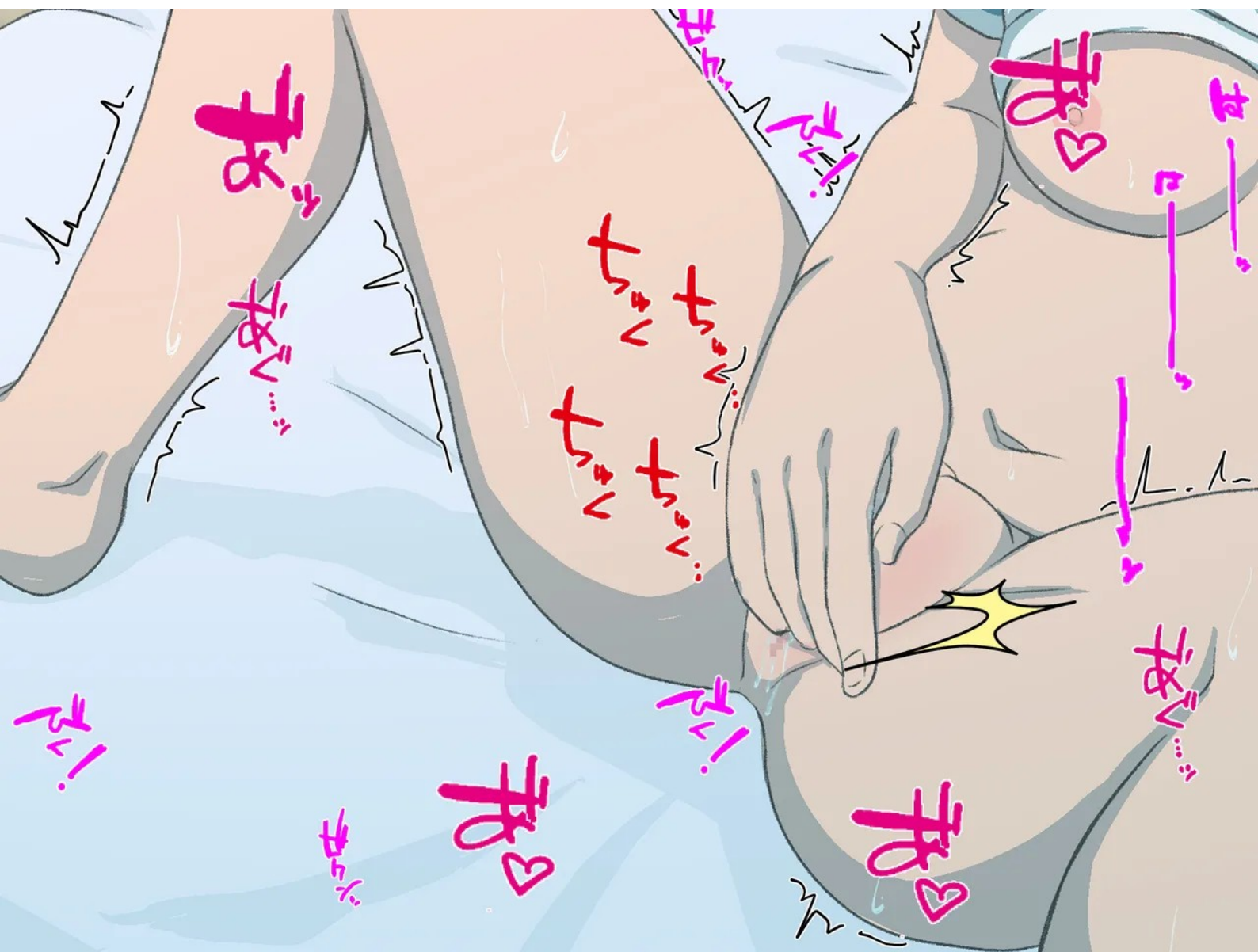










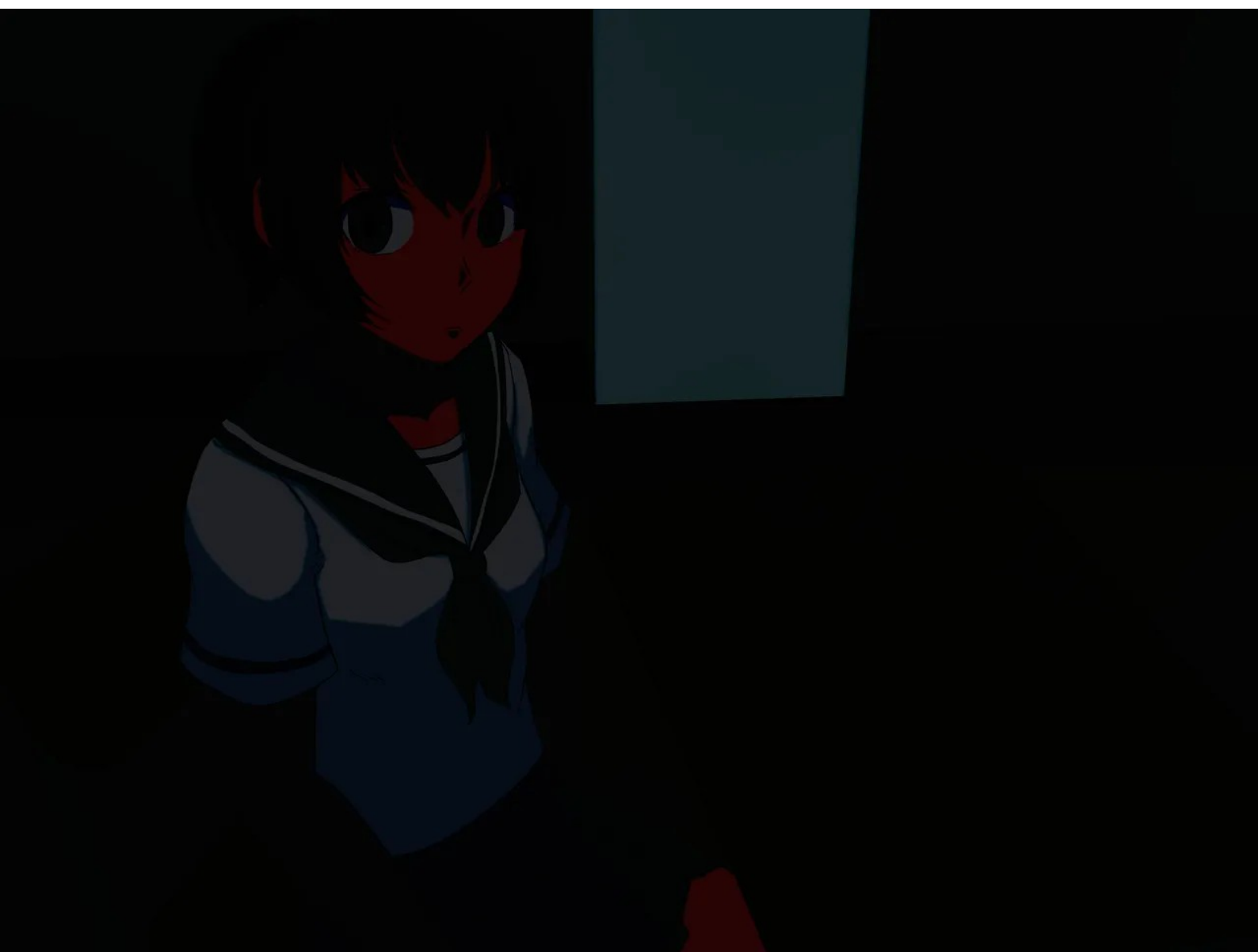


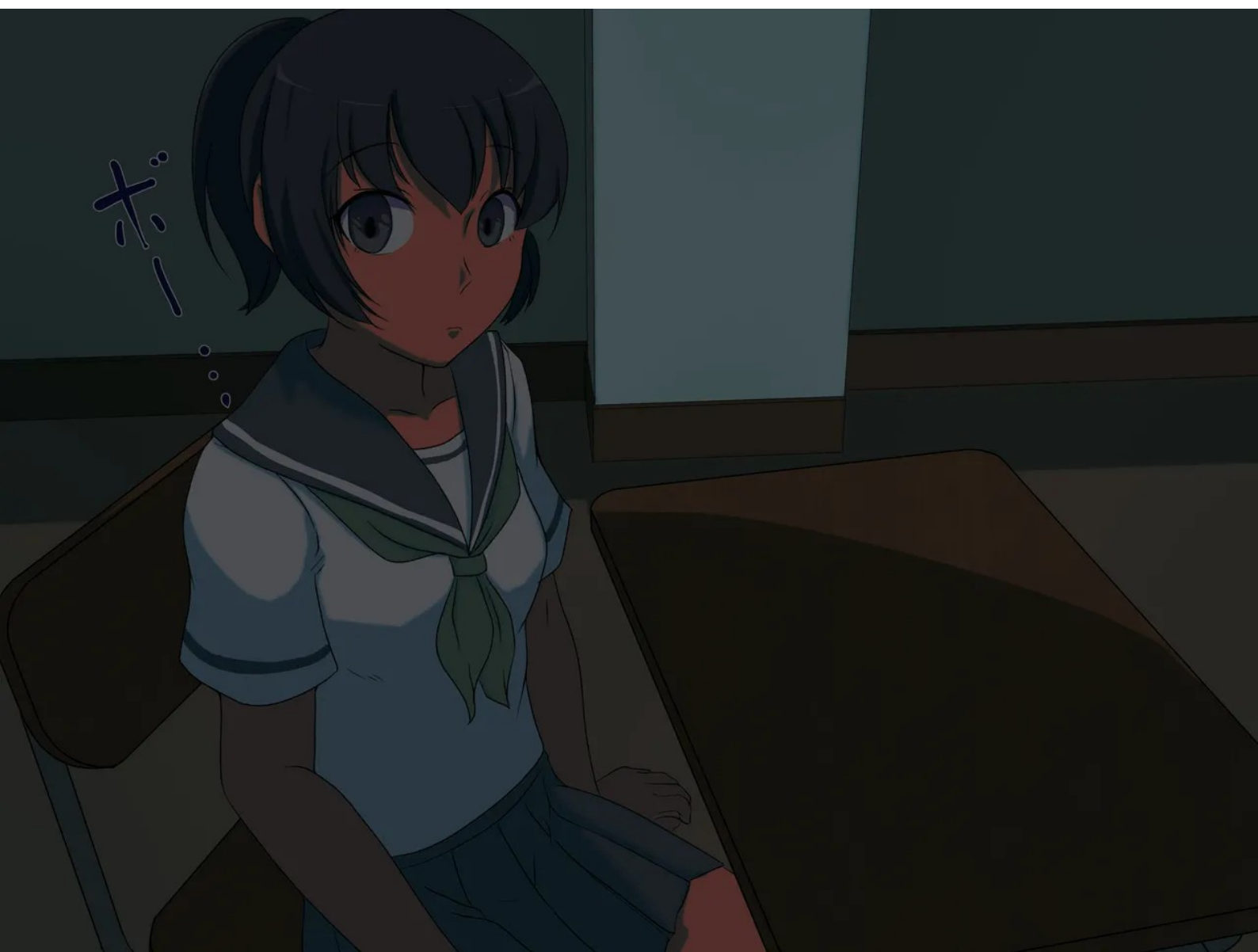










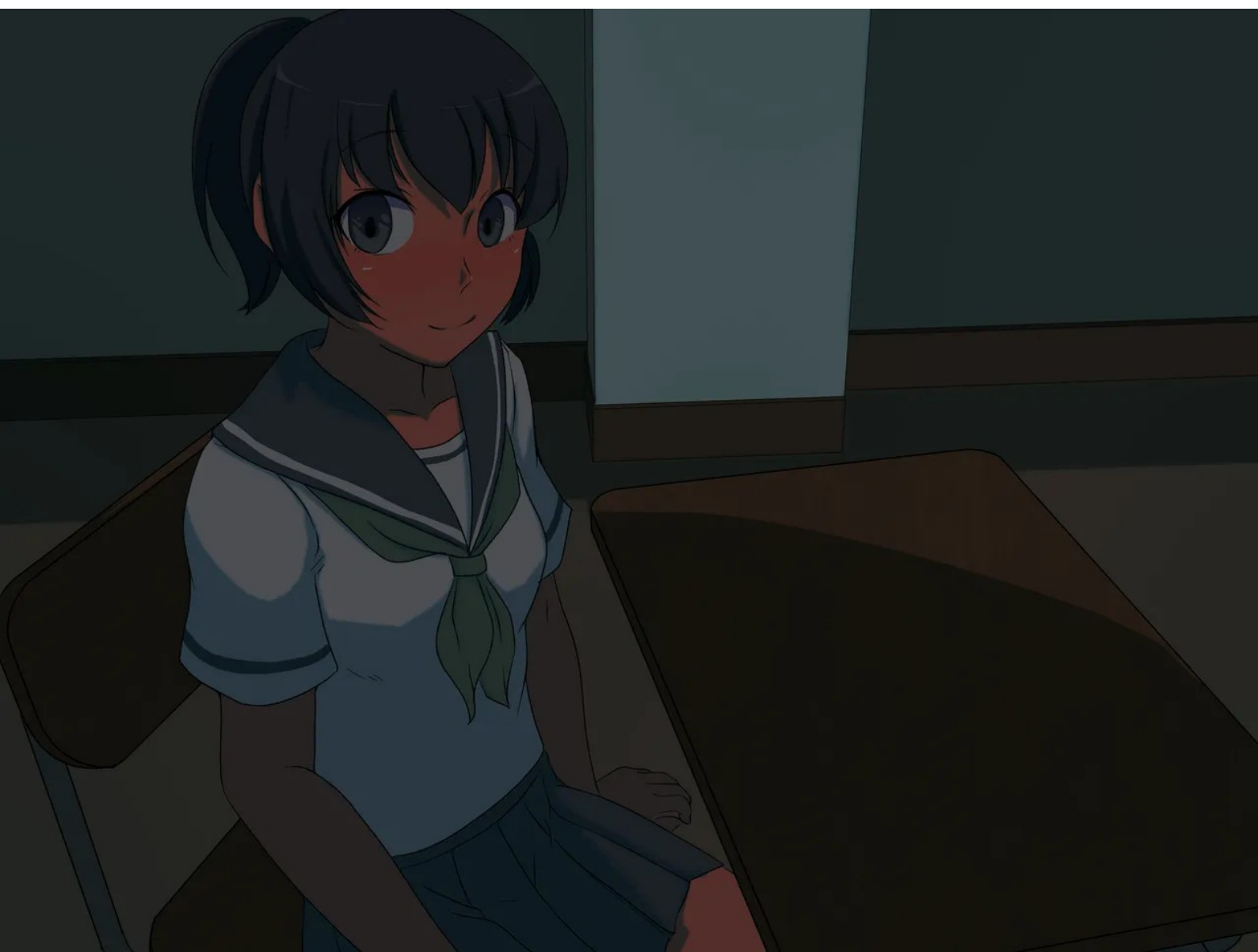


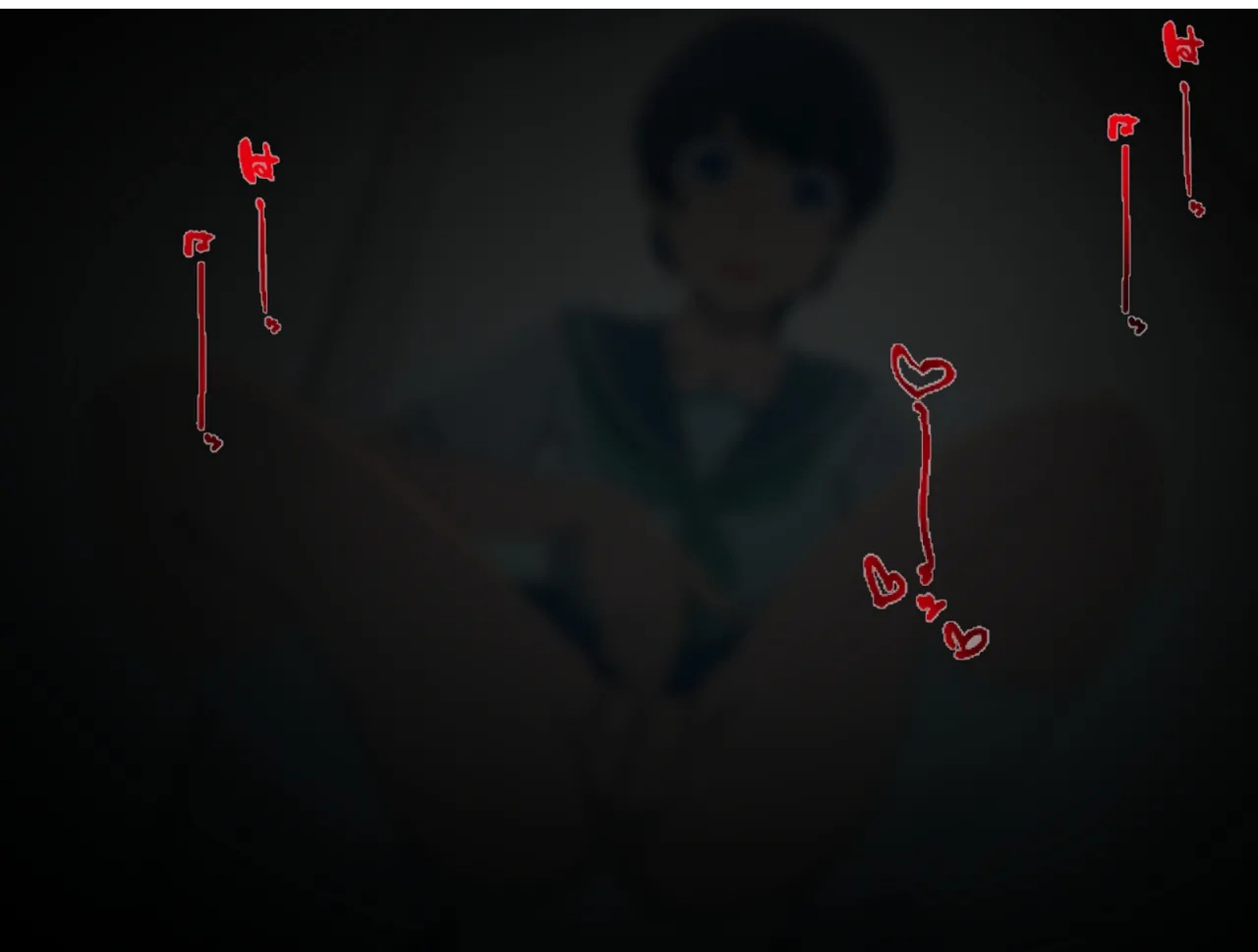












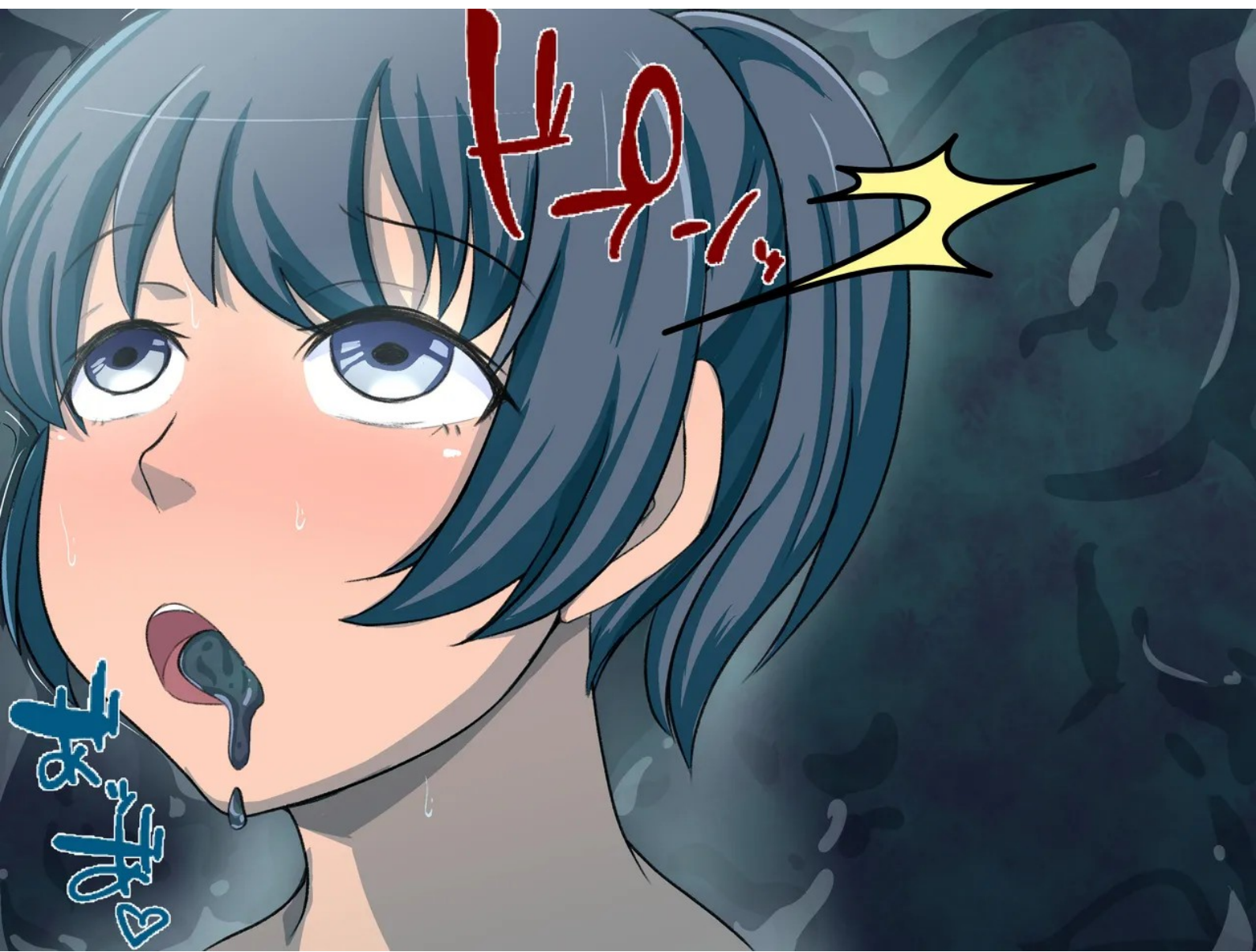


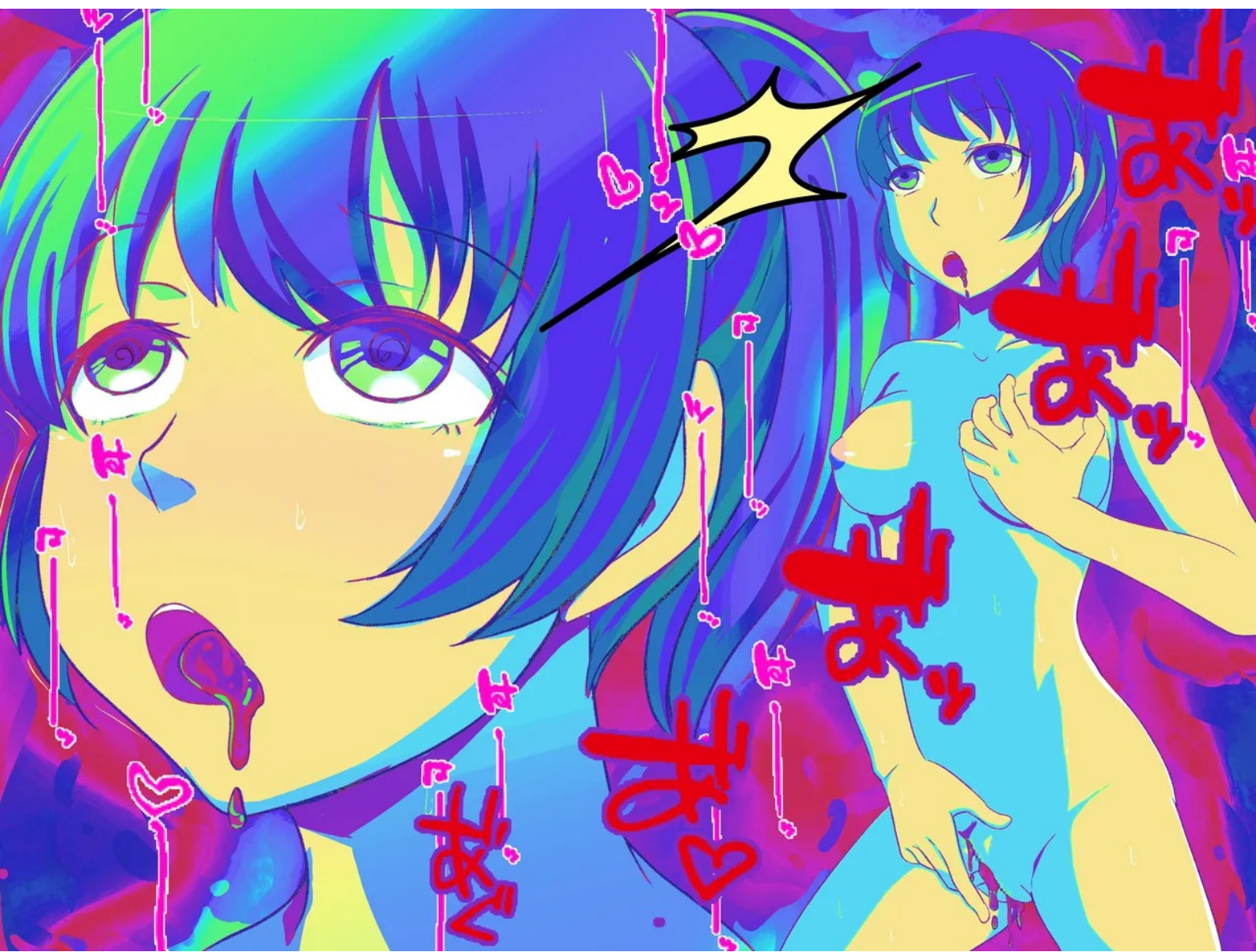






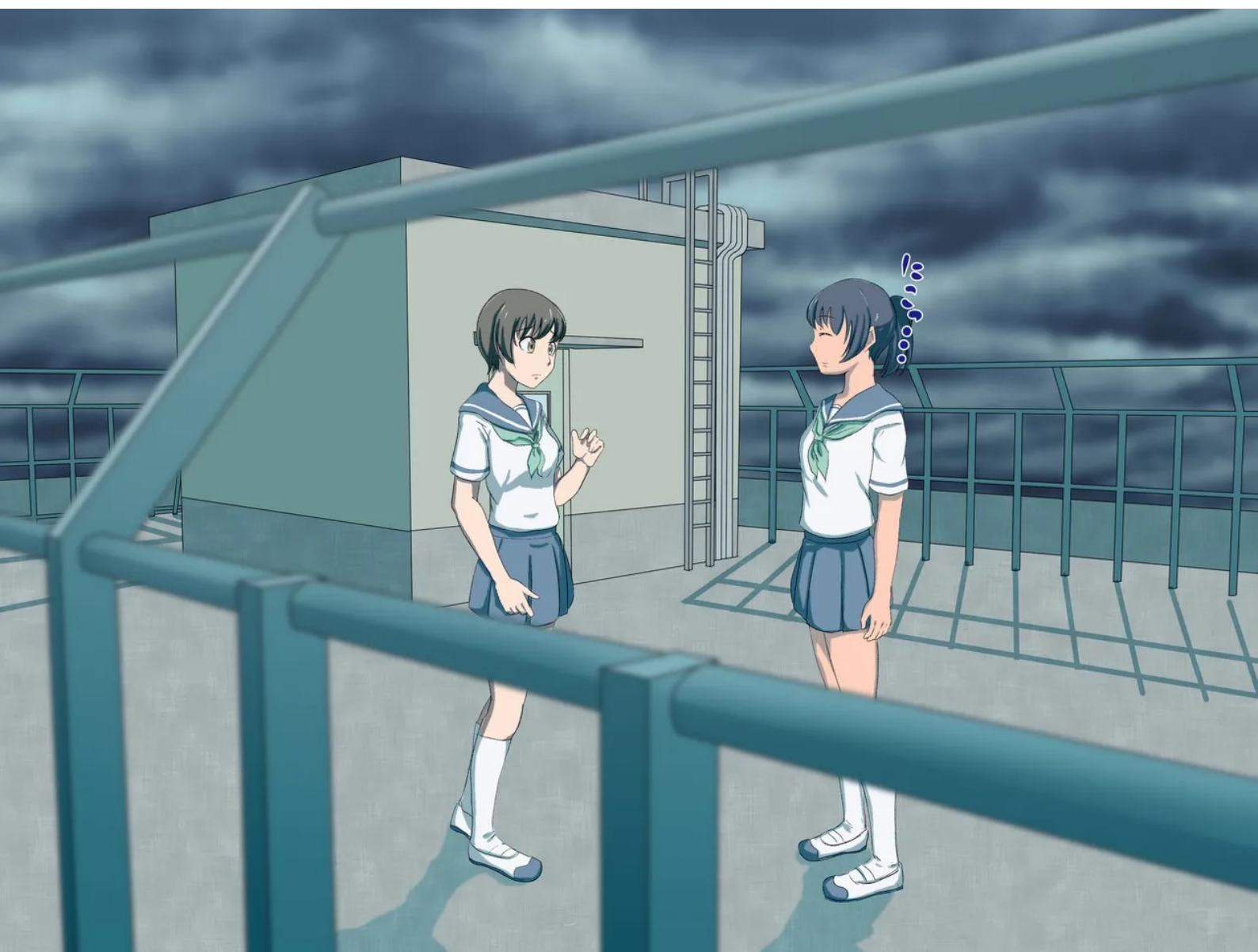


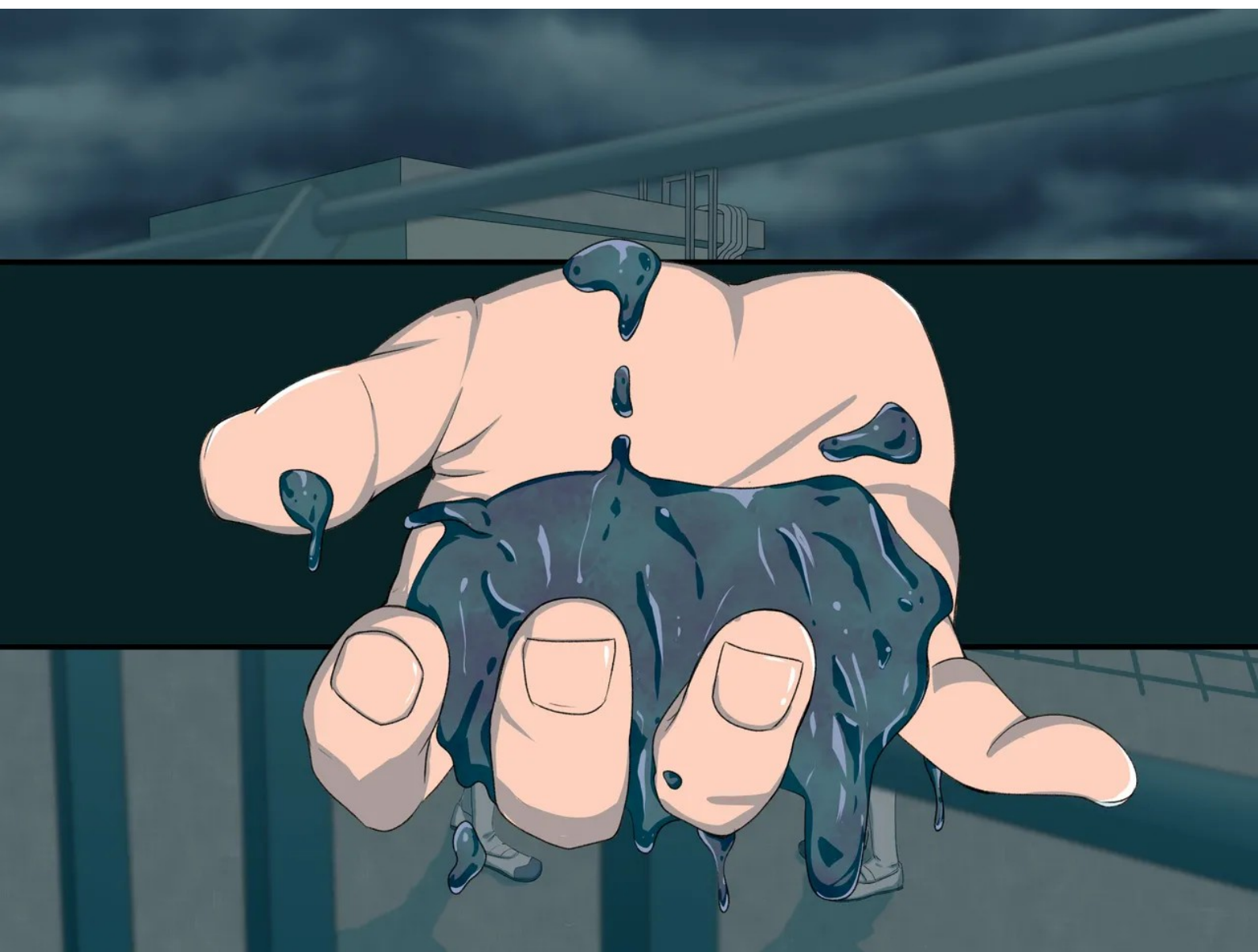




















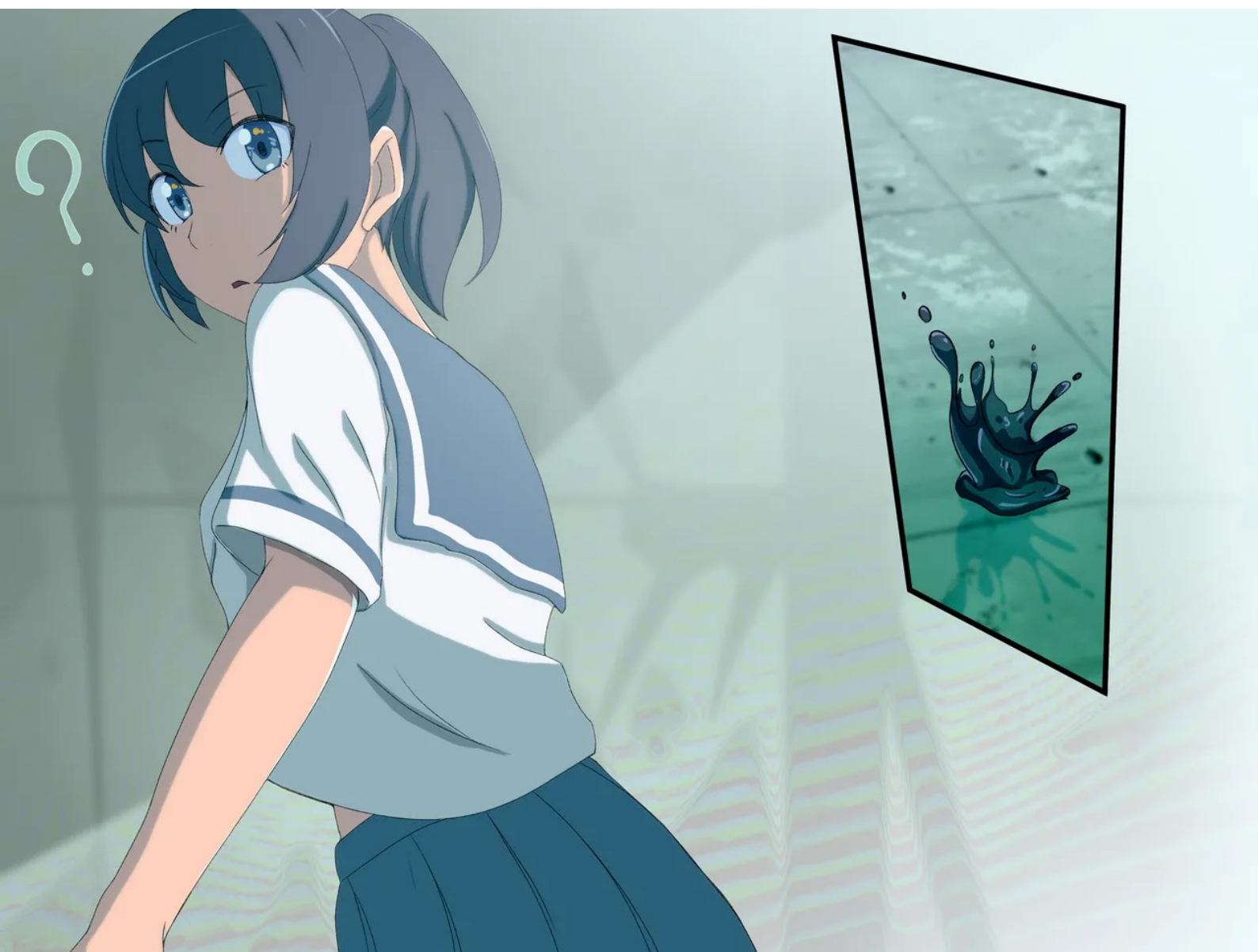














青い
粘液



